
僕と紙飛行機

如月 白雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と紙飛行機

【Nコード】

N4426U

【作者名】

如月 白雨

【あらすじ】

僕は中学生になった。

それでも、今までと変わらない。

これからも、他人に自分を良く見せようと努力する。

それが、僕が僕であるために必要なこと。

彼女と出会うまで僕はずっとそう思っていた。

春（前書き）

私のはじめての長編小説のリメイクです。
のんびりと更新していくつもりなので、気長にお待ちください

春

体育館の窓から風と桜の花びらが入り込み、黒色のカーテンを揺らしている。

そのたびに、陽光が薄暗い体育館に射し込む。

僕は等間隔に並べられたパイプ椅子の一つに座りながら、伸び縮みする陽光の筋をボンヤリと眺めていた。

僕の周りには、同じ年位の男女が何十人とパイプ椅子に鎮座し、舞台の上で演説している校長先生を見つめている。

入学式とは想像していた以上に退屈なものだ。

校長先生の長々とした前置きの与太話に本題の式辞まで、どれもがツマラナイ。

こんな式なんて早々に切り上げてしまえばいい。

僕は手に持っていたプログラム用紙を丸めながら小さくため息をついた。

「なあ、恵介」

後ろから、小声で呼ばれる。

声の主は松崎晃。

晃は幼稚園からずっと一緒に幼なじみの一人だ。

「何だよ、晃」

僕は後ろを向き、小さく返事をした。

晃はブカブカの制服をしきりに気にしながら、短い黒髪を掻いている。

頭を掻くのは晃の癖だ。

僕は内心、いつか禿げるのではないかと心配している。

「クラス発表って何時からだっけ？」あまりに退屈なせいか、顔をしかめながら訊ねてくる。

「後、二十分くらいだろ……」

僕は丸めたプログラム用紙を広げながら適当な時間を伝えた。

すでに予定されている式辞の時間をオーバーしており、僕には分からなかったからだ。

終了時刻は正に、校長のみぞ知る、と言ったところだ。

晃は僕の返答を聞くと「まだ、そんなにあるのかよ！」と少し大きな声で、僕に文句を言ってきた。

何人かの生徒がその声に驚きこちらを振り向く。

怪訝そうな視線を浴びせられ僕は気恥ずかしくなり、晃を睨んだ。

「もう少し、小さく喋れよ。恥ずかしいだろ」

「だってさー、退屈なんだよ。大体、話が長いんだよ、あの校長」

「そのくらい我慢しろよ」

僕はそう吐き捨て、前を向きなおした。

その後も晃のぼやく声が聞こえてきたが、面倒なので無視することにした。

入学式初日から変なレッテルをはられてはたまらない。

僕は晃のように自分を飾らない性格じゃない。

世間体ばかり考える人間だ。

どうすれば他人に良く見てもらえるか常に思案している。

僕は他人から良い子と思われなければいけないのだ。

そうしなければ、僕は僕を保てなくなる。

それだけは絶対に避けなくてはならない。

僕は丸めたプログラム用紙を強く握りしめた。

ふと、隣でガサガサと音がするに気が付き、僕はそ気になって隣に視線を移した。

視線の先にはひとりの女生徒がプログラム用紙を使って紙飛行機を作っていた。

整った顔立ちで目元に小さな黒子がある。僕より背は少し高く、肌はかなり白い。

長い黒色の髪の毛は一本一本が艶やかで根元から毛先までおさまるまともな感じを持っているのが見ているだけで分かった。

しなやかな手がゆっくりと紙飛行機を完成させていく。

なぜだか、その光景に僕は別の世界に引きずり込まれていくような感覚を覚え、すっかり釘づけとなってしまうていた。

すると「何か用？」と透き通った鈴のような声が僕の耳に届く。

それが、あの女生徒の声だと気づくのに関時間がかった。

それほどまでに、僕は彼女の姿に見惚れてしまっていたのだ。

彼女の手は止まり、作りかけの紙飛行機が優しく握られている。

「いや……何でもないよ」僕はそう答えるので精一杯だった。

すると彼女は「そう」とそっけなく言うと、また手を動かし始めた。

僕は心の中で胸を撫で下ろした。

まさか、声をかけられるなんて思ってもみなかった。

今の行動で彼女は僕をどう思っただろうか。

きっと、変な奴と思われたに違いない。

考え始めると、どんどんと悪い方向に考えが進んで行ってしまふ。出来ることならば、今すぐにでも体育館から飛び出して何処か遠く

へ消えてしまいたい。

そう思わずにはいられなかった。

僕が内心、気恥ずかしさのあまり悲鳴を上げているさなか、体育館中から拍手が鳴り響いていた。

僕はその音によって現実に戻された。

とりあえず、僕も周りに合わせて拍手をしておく。

横目に見た隣の女生徒は相変わらず紙飛行機をさわっていた。

「それでは、指示に従って体育館の外に出て下さい」

舞台の端に立っていた男性教員がマイクを通して全員に指示をだす。先ほどの静けさが嘘のように騒がしくなり、各々の列で指示された順に体育館の外に出ていく。

僕の隣に座っていた女生徒も立ち上がり、指示に従って外へ出て行った。

その姿は凜として、綺麗に輝いて見えた。

僕はその姿に大きなため息をついた。

「やっと、終わったなー」先まで、ずっとボヤいていた晃が元気に言う。

「うん……」

「何だよ、元気ないな。腹でも痛いのか？」

「気にしなくていいよ。いつものマイナス思考が出ただけだから」

僕はそう言って女生徒の座っていたパイプ椅子を見た。

椅子の上にはプログラム用紙で作られた紙飛行機がそっと置かれていた。

僕は無意識のうちに紙飛行機に手を伸ばしていた。

「何してるんだよ、置いてくぞ？」 晃はそう言いながら、既に出口の方に向かっていた。

僕はその言葉に煽られ、急いで紙飛行機を手にとって晃の背中を追った。

体育館の外に出ると、暖かい陽光と甘い香りを孕んだ桜吹雪が僕を包んだ。

「クラス発表って、どこで張り出されるんだ？」晃は頭を掻きながら、僕に訊ねてきた。

「職員室前だろ」

僕は肩に背負っているカバンの中に、紙飛行機をしまいながら言った。

僕らより先に体育館からでた生徒達はまばらに職員室に向け歩いている。

まるで、アリの行列のようだ。

そして、そんなアリの行列について行くと、職員室前についた。

其処には大きな掲示板がありクラス発表の大きな用紙が掲載されていた。

掲示板の前には生徒達が肩をぶつけ合うように群雄割拠している。

「どうする？」

僕は晃に訊ねる。

とは言っても彼がなんと応えるかは容易に想像がつく。

「無論、強行突破だ！」

恐ろしいまでに予想通り。

晃はズカズカと威勢良く戦場に突っ込んでいった。

何とも、勇ましいものだ。

虚弱体質である僕には到底マネできない。

ここは大人しく、遠くから彼の勇姿を眺めておくことにしておこう。それから五分ほど経過し、晃は戦場から無事に帰還してきた。

その表情はやたらとニヤついている。

「どうだった？」

「俺たち共に三組みだぜ」

晃は頭を掻きながらそう言って笑う。

これで一体、何回ほど同じクラスになっただろうか。

僕の記憶が正しければ小学校六年間は常に同じクラスだった気がする。

彼曰わく「俺達は運命の赤い糸で結ばれている」だそうだ。

何とも気色悪い。

もし、そんな糸が本当にあると言つのなら僕はとつの昔にその糸を切り刻んでいるだろう。

「また、一緒に……」僕はため息まじり言葉を吐き出した。

「ほら、早く教室に行こうぜ！」

晃は上機嫌で僕に背を向け、校舎の中に入っていく。

僕は「まったく」と独り言を呟きながら晃が入っていった校舎を見つめた。

シンプルな構造で、お世辞にも綺麗とは言えない。

だが、どこか懐かしさを感じる。

僕はこれから、三年間を此处で過ごすんだ。

そう思うと、なんだか少しだけ心臓がドキドキした。

校舎の中に入ると、既に何人もの生徒達が我先にと教室に向かっていた。

僕の教室は三階にあつたはずだ。

面倒くさい気持ちを抑えながら仕方なく階段を上り始めた。

ホコリ臭い校舎をゆっくり上っていく。

天窓から射し込む春の陽光が暖かく僕を包む。

自然に心と体が軽やかとなり、階段を上る速度が早まる。

だが肩に背負っているカバンが階段を上るにつれ、段々と邪魔になっていく。

これから、毎日この階段を上る。

そう思うと少しばかり憂鬱だ。

三階は不自然なくらいに静かだった

確か、僕のクラスの三組以外、どのクラスもこの階を使用していないはずだ。

そのまま廊下の一番先にある、自分の教室に向かう事にした。

廊下の途中には使われていない教室と窓ガラスが等間隔で並び、

窓の外では綺麗なピンクの花びらが舞っているのが見える。

教室に近づくにつれ、心臓の鼓動が早くなっていき、手は汗で湿っぽくなってきた。

我ながらわかり易いくらいに緊張している。

僕は苦笑いを浮かべながら深呼吸をし、胸に手をあてる。

緊張した時は、こうしろと死んだお婆ちゃんがよく言っていた。実際、こうすると多少落ち着く。

「よし……」

僕は決心し、重い教室の扉を開いた。
中にはいると、六列のごとに机が幾つか並んでいた。
その上にはカバンなどの荷物がいくつか点在しているが、生徒の
姿は何処にも見られない。
教室を間違えた分けではないようだ。

でも、誰も居ないのはどういうことなのだろうか。
少しばかり気にはなったが取りあえず荷物を置いてから考えるこ
とにした。

黒板には白いチョークで座る席順などが丁寧な字で書かれている。
僕の席は一番後ろの窓際のようなのだ。
運が良い、そう思いながら僕は後ろの席を目指した。
歩きたびに木造の床が軋む。

並んでいる机を注意深く見ていくと、どの机も使い込まれた古い
ものばかりだった。

その上、どうも埃っぽい。

咳払いをしながら僕は自分の席にカバンを置く。

すると窓際の薄い緑色のカーテンから仄かに甘い風が吹いている
事に気がついた。

どうやら、窓が開いているようだ。

僕はカーテンをそっと掴み開いた。

外の景色は実に美しいものだった。

グラウンドが一望でき、周辺には桜の木が幾つも並んでいる。

薄い桃色と白い桜の花びらが宙を舞い、風がそれを遠くへ運んで
いく。

遠くには小さな山々が腰を据えている。

鳥の囀りが僕の耳に優しく語りかける。

長閑で清らかな風は僕の心を洗い流してくれているかのようだ。

僕はしばしの間この美しい風景に心奪われていた。

そんな時、後ろから扉の開く音が聞こえてくる。

僕は慌てて、その音のする方を振り向いた。

振り向いた先には入学式で僕の隣にいた少女がいた。

彼女は無表情のまま僕を見つめている。

僕もそれを返すように見つめた。

お互いに見つめ合うその時間は心地よさと気まずさがおり混ざっていた。

沈黙の二文字が僕らの間を駆け巡っていく。

その間も春風は相変わらずカーテンを揺らしている。

やがて、僕の中で心地よさよりも気まずさが強まりだした。

僕はそれに耐え切れず口を切った。

「君さ……入学式の時、隣にいたよね？」

「いたわね」

たった一言の返答。

それはあまりに素っ気ない声色であった。

また、沈黙が訪れようとしている。

僕はそれを追いつくようにもう一度、彼女に訊ねた

「他の人達は何処に行ったか分かる？」

「みんな下にいるわよ」

「何しに？」

「さあ？何か騒いでいたけど、私は興味がなかったから教室に戻ってきただけ」

彼女の答えにとりあえず納得した。

そうなるともう間もなく、全員戻ってくるだろう。

僕は少しだけ苦笑いを浮かべた。

「ねえ……何で気づかなかったの？」

急に彼女の方が僕に質問してくる。

僕は彼女から問いかけられるなど予想にもしてなかった。

すぐには口が開かなかった。

そんな僕を見てか彼女は言葉を続けた。

「あれだけ騒がしかったら気づくだろうし、普通は気になって見に行くものじゃない？」

「……本当に気づかなかったんだよ」僕は正直に答えた。

「そう……私、何となく貴方って人が分かった気がする」

彼女のその言葉に僕は動揺し何か得体のしれない恐怖を感じた。

この程度の問答で理解などされるはずがない、僕はそう自分に言い聞かせた。

なるべく動揺が顔にでないように気を引き締める。

だんだんと数人の声が教室に近付いてきているのが分かる。

「みんな戻ってきたみたいね……。貴方、名前は？」

「……白河恵介」

「そう、私は水瀬奏。よろしくね」

そう言っていると湊は微かに笑みを浮かべる。

その笑みが作り物であることを僕はすぐに気がついた。

得体の知れない恐怖だった。

僕の奥底にくすぶる黒く醜いものを見透かしたような彼女の目。

あの目が今も僕のことを見つめている。

それは息の出来ない水中に無理やり放り込まれたようで苦しかった。

息が詰まるような居心地の悪さだ。

今すぐにデモ教室から逃げ出さなくては仕方なかった。

それでも僕が逃げ出さなかったのはどうしようもない自尊心からだった。

自分の座先に着く。

すぐに担任の教師が現れ簡単な自己紹介や所持連絡が教室で行われていく。

その間も僕は彼女の事ばかりを考えた。

恐怖の対象でありながら彼女の挙動ひとつにすら気になって仕方ない。

どうしても目が離せない。

それは皮肉にも恋慕の感情を持ったかのようなであった。

やがて担任の教師は全ての連絡を伝え終わり、そのまま解散となった。

すぐに晃が僕の座席の元に近寄ってくる。

「早く帰ろっぜ」

間髪を入れずそう言って僕を促す。

僕はそれに頷きながらも、彼女から目を離さないでいた。

クラスメートたちが次々と教室から出ていき、彼女もまたそれに続いていく。

その途端に僕を縛っていた緊張が解ける。

僕はひとときの安息をついた。

僕らも教室を出る。

そのまま階段を下り、校舎を出ていく。

しばしの間、くだらない会話を続けた。

話題は自然と皆が教室にいなかった話になった。

「そういえば、何でみんな教室にいなかったの？」

「あの後、二階の廊下で上級生が部活の部員集めをやってたんだよ」

さほどその件が興味なかったのか晃は何食わぬ顔で答えた。

それにしても入学式の日に一年生の校舎で勧誘などして大丈夫なのだろうかとわずかながら疑問を覚えた。

部活勧誘は普通ならもう少し一年生が学校に慣れてから行われるものだろう。

「もちろん無断だよ。教師が顔を真っ赤にして怒ってたしな」僕の表情から考えていることを読み取ったのか晃は話してくれた。

晃はどうも表情から相手の考えを読みとることが得意なようで僕は度々驚かされている。

小学三年生の頃だったろうか。

僕らのクラス間ではカードゲームが流行っていた。

誰もが一度は見たことがある有名なゲームだ。

そのゲームは非常に読み合いが重要で、例えばピンチになった場合、対抗手段もないくせにはったりをかまして逃れたり相手の次の行動を読んで戦略を立てたりと子どもの遊びとは思えないほど頭を使わなければならない。

そのゲームが晃は得意だった。

読み合いが上手く勘も鋭い。

こちらがどれだけハツタリをかましても簡単に見破ってしまい、正に負けなしの強さを誇っていた。

そして僕はそんな晃の鋭さを心の片隅で嫌悪していた。

「……僕ってそんなに分かりやすい？」

「まあ、長い付き合いだしな」いつもよりトーンの低い声色で僕の問いに答える。

そのまま何がおかしいのか一笑する晃。
僕はそれがどうにも気に食わなかった。

「おい恵介、見てみるよアレ」急に声色を変え、僕の服を引っ張り出す。

「何だよ」

「あのババア、めちゃくちや化粧濃いぜ。ヤバすぎだろ」晃は楽しそうに中年の女性を指差し破顔一笑する。

僕は彼の指さす方向を横目に見た。

確かに、化粧が濃い。

だが、大笑いするほどなのかと言われると同意は出来ない。

「……あっそう」

苛立ちが消えたかわりに湧き上がった感情は呆れであった。
ついていけない。

そう思った時、晃の表情に違和感を覚えた。

僕はその違和感を表情に出さないよう気を付けながら素っ気なく
答え足取りを速める。

「あ、おい」

晃はすぐに追いかけてくる。

僕は見逃さなかった。

僕の感情が切り替わった途端、一瞬だけ見せた晃の笑み。

あれは間違いなく安堵の笑みだった。

途端に僕は自分が惨めになった。

晃と別れて家に帰宅する。

靴から鍵を取り出し、ドアの鍵口に差し込む。

そこで違和感を感じた。

ドアの鍵が空いていたのだ。

僕は警戒しながら黒色のドアノブに手をかけた。

そのまま玄関を覗くといつもは綺麗に並んでいる靴が一足だけが散らばっていた。

「誰かいるの？」僕は玄関に足を踏み入れながら言う。

「おお、お帰り」

僕の声に反応して居間の方から返答が聞こえてくる。

その声は兄の陽平のものだった。

「あれ、今日は部活はないの？」

そう言いながら靴を脱ぎ、居間に向かう。

陽平は高校二年生で剣道部に所属しており、いつもなら帰宅は日が沈む頃である。

陽平は居間のソファで横になっていた。

「お前は今日、中学の入学したただろ？ということとは同じく高校も入学式なわけ。よって、今日はお休み」陽平は僕を一瞥しながらどこか面倒くさそうに話す。

「ああ、そっぴえばそつだ」

少し考えれば分かることだった。

僕はカーペットの敷かれた床に腰を降ろし、ソファの前にある卓袱台の上にカバンを置いた。

「どうだったよ？」唐突に陽平が僕に訊ねる。

「何が？」

「入学式だよ」

その問いに僕は一瞬だけ水瀬奏の顔を思い出した。だが、それを口にする気にはなれなかった。

少なくとも、陽平にそんなことを言つと変な勘違いをするに決まっている。

「……まあ、普通だよ」僕はそう言つて卓袱台の隅っこにあったテレビのリモコンに手をかけた。

「何だよ、普通つて。もっと何かあるだろ？例えば、可愛い子がいたとかさ」

「兄貴……そんなこと言つてると彼女に言いつけるよ」

陽平は変なところで勘が鋭い。

このまま続けるとその話題は僕に不利になると思い、僕は咄嗟に陽平の彼女を話題に引つ張り出した

しかし、陽平はまるで気にする様子を見せない。

「今のあいつは脳みその全てが剣道一色だから、一々そんなこと気

にしないよ」

陽平の彼女は同じ高校の剣道部に所属している。

詳しくは知らないが、話によると生真面目で不正な行為を嫌い、何から何まで自分でこなしてしまう完璧主義者。

そのうえ剣道も男勝り。

おまけに美人だそうだ。

なぜ陽平にそんな彼女がいるかというと、曰く「剣道に関しては俺の方が強いから」だそうだ。

陽平は何から何まで中途半端であるが剣道だけは凄い。

中学では個人で全国経験があり、幾つもの高校から推薦があつた。

しかし、陽平はそれを全て断り、家から一番近い公立校に入学してしまつた。

理由を問うと、「団体戦に興味はないし、俺がどこにいこうとも勝つことには変わらない」だそうである。去年も個人で全国出場を果たしている。

両親はそんな陽平を鼻高々に自慢している。

僕もまたそんな自信に溢れる陽平が自慢でもある。

だが、それと同時にコンプレックスでもあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4426u/>

僕と紙飛行機

2011年11月17日19時52分発行